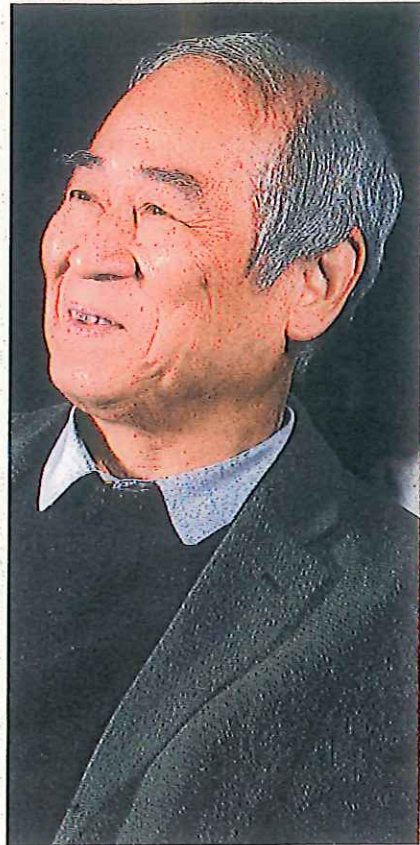


こころの玉手箱

演出家
鈴木 忠志



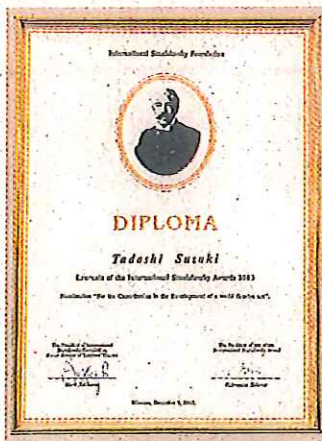
高校時代は文学に憧れ、ドストエフスキー、トーマス・マン、小林秀雄などいろいろな本を読む中で、チェーホフも読んだ。短編小説「ホフ」も面白いが、チェーホフはむしろ劇作で有名。ホフはむしろ劇作で有名だというのが戯曲を読み出した。しかし、視覚的なイメージが浮かばず、内容がよくわからない。イブセン

に比べて、テーマがすぐに理解できなかった。何がすばらしいのか知りたいと思い、早稲田大学の学生劇団に入った。そこではロシアの演出家スタニスラフスキーが創った演技システムが採用されていた。彼は世界中に影響を与えたモスクワ芸術座の創設者で、チェーホフの戯曲を演

出している。この人が書いた演技システムの本、「俳優修業」は当時の日本の現劇、新劇の教科書のようになっていた。勉強にはなったが、演技のとりえ方が少し二面的で、日本人には適さないのではと感じた。モスクワ芸術座の初来日公演で、チェーホフの「三人姉妹」を見た。女優3人

スタニスラフスキー賞の盾

ロシアの文化力に感心



2004年10月に国際スタニスラフスキー賞をもらうことになった

「生きていきましようよ」と涙を流しながら言うのが、舞台を創りたいと思い、私気持ち悪く、すこし白けてこの演技手法ではダメだといふ思いがした。大学の傍らの喫茶店の2階に仲間と早稲田小劇場という小屋をつくり、新劇とは違った演劇活動を始めた。登場人物に日常的な感情移入をしな

から人物を演技で表現する舞台を創りたいと思い、私なりの演技訓練の方法を考へ出す。それがモスクワ芸術座を手本にしていた先輩の演劇人たちの仕事を批判することにもなった。ところがソ連崩壊後、状況も変わった。古くからの友人であるオレク・タバコフがモスクワ芸術座の芸術

「生きていきましようよ」と涙を流しながら言うのが、舞台を創りたいと思い、私気持ち悪く、すこし白けてこの演技手法ではダメだといふ思いがした。大学の傍らの喫茶店の2階に仲間と早稲田小劇場という小屋をつくり、新劇とは違った演劇活動を始めた。登場人物に日常的な感情移入をしな

「生きていきましようよ」と涙を流しながら言うのが、舞台を創りたいと思い、私気持ち悪く、すこし白けてこの演技手法ではダメだといふ思いがした。大学の傍らの喫茶店の2階に仲間と早稲田小劇場という小屋をつくり、新劇とは違った演劇活動を始めた。登場人物に日常的な感情移入をしな

それにしても、世界に向けてスタニスラフスキー賞のようなものを創設できるロシアの「文化力」には感心する。賞の額を見たりすると自分の来し方を思い出し、まだまだやるべきことが多く残っていると思う。

私はあるときから同時代を生きている人や尊敬できない人からの賞、日本人だけを対象とする賞はもらわないことにしていたが、これらの原則に抵触しないのもう一つのことだ。この受賞は日本の演劇史においても、大きな意味があると考えたからである。

総監督になり、ロシア人俳優を使って「リア王」の演出をしてくれと頼まれた。2004年10月、その舞台の初日に国際スタニスラフスキー賞をもらうことになった。感慨深かった。

こころの玉手箱

演出家

鈴木 忠志

②

早稲田小劇場設立から7年目の1972年、パリの「諸国民演劇祭」に招待された。芸術監督は、オデオンの支配人を務めた俳優ジャン・ルイ・バローだった。初めての海外公演は刺激的で、私にとって演劇人生の転換点となった。

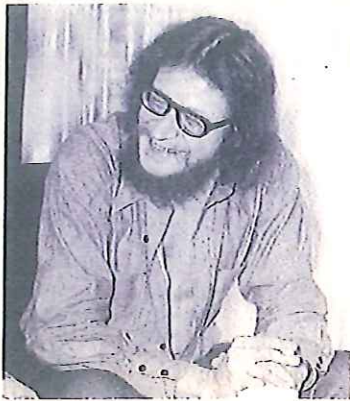
上演したのは「劇的なるものをめぐってⅡ」から鶴屋南北、泉鏡花などいろいろなレベルの演技を一つの舞台に構成し直したものだ。

最初の「劇的なるものをめぐって」は、女優の白石加代子が、猫背矮軀式という体つきでタクワンをポリポリやりながらしゃべるのだが、「初めて南北の言葉が生きても聞こえた」という評価を得た舞台だ。南北のセリフは字余りで完全な七五調ではない。歌舞伎俳優がやっても、よそよそしく聞こえるところを白石がうまくやったので演劇評論家たちがみな驚いた。

パリ公演でもタクワンを持って行った。たるにぬかみそをつめていた状態なので、ホテルでもおっけて仕方がなかったが、舞台でもおいがし、「におう舞台」でも評判になった。

好評につきジャック・ラング文化大臣が劇団をナンシー演劇祭に招待してくれて、そこでは「劇的Ⅱ」の完全版をやった。それからオランダにも呼ばれ、アムステルダムがツアーの最後

パリで親しくなった



パリで親しくなった

グロトフスキー

エネルギッシュな稽古、称賛受ける

だったので、「お金がないから舞台装置を売ります」と舞台でオークションをやったり、筆とか量が売れた。

パリではポーランドの前衛演劇人グロトフスキーと親しくなった。彼が日本にやってきた時、稽古が見たいというので団員の訓練を見せたら、「ブレイキの暴力」と言った。ハイスピードで走ってきた車が静止した瞬間のエネルギィがすごい、ということだった。ヨーロッパの人は静止している状態の演技が苦手で、それが驚きだったようだ。

グロトフスキーだけではなく、ピーター・ブルック、ムヌーシュキンら世界的演劇人が私の演劇に強い関心を持った。ならば高いレベルを維持していくためには集中的に稽古するしかない。

しかし東京にいて、昼アルバイトをし、夜稽古する程度ではレベルを保てないと思ひ、東京を離れて富山県の山の中、利賀村(現南砺市)に拠点を移した。

パリで親しくなった

こころの五手箱

演出家

鈴木 忠志

3

1974年、岩波ホール
の総支配人だった高野悦子
さんから芸術監督をやって
ほしいと頼まれた。「トロ
イアの女」などをやったが、
パリなどでの経験から、日
本にも国際交流の場、国際
化した場がなければならな
いと思った。

東京ではじっくり交流で
きる場がない。公共ホ
ールは午後9時には追い出
されるし、狭い自分の家にも
呼べない。利賀村(現富
山県南砺市)で合掌造りの
家を劇場にして活動を始め
ていたが、ここをそういっ
場にしようと思いついた。

こうして当時、私の演劇
を支持してくれた西武百貨
店会長の堤清一さん、草月

流の家元で映画監督の勅使
河原宏さん、岩波書店社長
の緑川亨さんらに理事にな
ってもらって国際舞台芸術
研究所という財団を立ち上
げた。建築家の磯崎新、文
化人類学の山口昌男、歌舞
伎研究の郡司正勝、英文学
の高橋康也、フランス文学
の渡辺守章の各氏も賛同、
それぞれの得意分野で協力
してくれた。

磯崎さんがギリシャにあ
るような野外劇場を設計し
てくれた。人工的な池も作
り、勅使河原さんが彫刻を
置いた方がいいと言って、
利賀村百瀬川の河原の石を
集め、香川県にあったイサ
ム・ノグチの工房に運び削
ってもってきた。



今も立ち続ける鶴石
は協力のシンボル

利賀芸術公園・鶴石

富山で国際演劇祭立ち上げ

積み重ねた石の一番下には
庵治町産の花崗岩を置い
た。鶴の姿に似ているので
鶴石と呼んだ。

こうした多くの人の協力
を得て、利賀国際フェステ
イバルを82年に実施、それ
から長きにわたって続ける
ことができた。その協力の
シンボルが、利賀芸術公園
の野外劇場の池に今も立ち
続ける鶴石である。

当時の日本には活気があ
った。五島列島や、北海道
の小樽などから見にきたと
いう人もいて、舞台を見た
後は、村の民宿で芝居談義
が盛り上がり、中には結婚
したカップルも出た。河原
で勝手にキャンプをしてい
た人たちもいた。

その利賀村も町村合併し
て南砺市になった後、人口
が700人を切り、65歳以
上が半数を超える限界集落
になっている。しかし、一
方で劇場や宿舍などの施設
は年々充実してきている。
この利賀村をアジアの演劇
センターのようにできない
かと思っている。

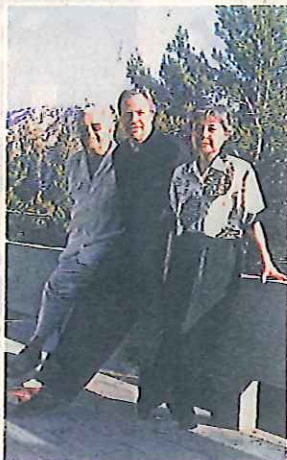
こころの玉手箱

演出家

鈴木 忠志

4

プロデューサー・斉藤郁子



左からユリー・リュビ
ーモフ、ロバート・ウィ
ルソン、斉藤郁子(ギリ
シャ・デルフィにて)

私の演劇活動を長年支えてくれたプロデューサーの斉藤郁子が昨年10月亡くなった。70歳だった。早大の学生劇団「自由舞台」で出会ったのが1960年、劇作家の別役実や斉藤、今も一緒に演劇をやっている森皓祐らと早稲田小劇場を立ち上げた。11月に劇団SCOTの拠点がある利賀芸術公園で偲ぶ会を開いた。建築家の磯崎新、石井隆一、富山県知事ら内外の友人、演劇人が多数参列、斉藤の死を悔やんでくれた。

斉藤は初め、女優として舞台上に立ち、俳優座養成所で勉強もしていた。同期生には文学座に行く太地喜和子があった。卒業公演で劇団

四季からスカウトされたが、後に「四季に行かなくてよかった。私、歌うたえないから」と笑っていた。斉藤の運命が変わったのが、73年の欧州ツアー後、「これからは外国だ」と日本に帰らず、現地でもらった劇団の出演料を全部もってロンドンに語学研修に向かっていた。「明治維新の留学生のように、使命感に燃えて出かけていった気分だった」と言っていた。

実際、後で知ったのだが、斉藤の祖父は齋藤季治郎陸軍中将で、日露戦争に参加し旅順で乃木大将や東郷元帥らと一緒に撮った写真も残っていた。駐屯軍司令官なども務め、中国語、ドイ

「人間のオルガナイザー」を偲ぶ

ツ語、英語などが堪能だったという。父親は海軍航空隊の教官をしていた。若いころから「歴史に残る仕事をしたい」と話していたのも、こうした家庭環境のせいかもしれない。

斉藤は途中で女優から芸術家の役に立つことをやりたいと考えるようになった。それも本物の芸術家になければならない。斉藤ががんばってネットワークを作り、ロシアのユリー・リュビームフ、米国のロバート・ウィルソンら世界の演劇人と直接連絡して話がツーカーでまとまった。

生前のインタビューをまとめ「斉藤郁子 SCOTの軌跡を語る」という冊子ができたのはよかった。制作者というところ、お金を集めるのが仕事だと思われがちだが、斉藤の場合は、この人を助けたら、この人のためにこうした方がいいという気持ちの方が先にあった。いわゆる業界の演劇マネージャーではなく、人間のオルガナイザーだった。

こころの玉手箱

演出家

鈴木 忠志

5

私は静岡県の清水市(現静岡市清水区)に生まれた。静岡にある東海大学の付属中学に入学した。三保に先ず生たちの宿舎があつて、先生のうちによく遊びに行つた。夜になると砂浜で焚き火して、星空をながめて話し合つた。女の子と手をつないで歩いたりもした。貝殻を拾つたり、時には深海魚が打ち上げられたりしていた。別天地だった。

三保の松原から眺める海越しの富士山の姿がきれいだった。秋、冬になると空気が澄んで、いつでも見えていた。小さいころは、麦ふみをやらされたものだが、その時も高い建物がないからよく見えた。



後鳥羽院は「清見湯ふじの烟や消えぬらん 月影みがく三保のうら波」と詠った

三保の松原からは、天女が水浴びするために身につけていた衣

をかけたという羽衣の松があり、私が学校に通つていた当時は見事な枝ぶりだった。しかし、その松も老木となり衰弱してきたため、3年前、15歳ほど離れたところに「新・羽衣の松」が出現した。観光目的かもしれないが、こういう官僚的なやり方は少しさびしい。

三保の松原自体も当時と比べて大きく変わった。安倍川にダムができて砂が海に流れこまなくなり、砂浜が波に浸食され小さくなつ

ふるさとのシンボル、深い縁

ていた。それを食い止めるために護岸工事や消波ブロックが置かれ、自然の松林と砂浜が消えてしまった。

それでも、三保から見る富士山は美しい。後鳥羽院は「清見湯ふじの烟や消えぬらん 月影みがく三保のうら波」と詠んだ。富士山は日本人にとって独特なもので、富士山から逃れられないと思つた。明け方の富士は浮いているように見える。夜富士というのは月がこころと照っている時に、駿河湾の反射光で見る富士で、滅多にない。

富士山は私の心のふるさとだけでなく、日本人の心のふるさとだ。故郷を離れた演劇活動を続けていたのだが、1990年代半ば、静岡県舞台芸術センター(SPAC)の芸術総監督を委嘱され、富士山が見える日本平に劇場や施設を建てて演劇をやることになったのもまったくの驚きだった。